絶海中津『蕉堅藁』の作品配列について（三）

――七言絶句（八〇～九四）の場合――

朝倉和

はじめに

前々稿および前稿では、絶海中津（一三三六～一四〇五）の『蕉堅藁』の、主に律詩の作品配列について言及した。[1] 本稿からは絶句を見ていくが、『蕉堅藁』も含めて、わが国の禅僧が作成した絶句には題画詩が多く、詠作状況を判断しかねる場合もまた少なくない。今回は紙幅の都合上、七言絶句（八〇～一二八）のなかでも、特に八十番詩～九十四番詩について、可能な限りその詠作状況を明らかにし、配列順序について考えてみたい。

『蕉堅藁』の引用は『五山文学全集』第二巻、作品番号は蔭木英雄氏『蕉堅藁全注』（清文堂、平一〇）による。返り点は蔭木氏前掲書、入矢義高氏校注『五山文学集』（新日本古典文学大系48、岩波書店、平二）、梶谷宗忍氏『蕉堅藁　年譜』（相国寺、昭五〇）等を参考にして、私に施した。また、本論に入る前に、承前の如く絶海の生涯のあらましを確認しておく。主な史料は、『仏智広照浄印翊聖国師年譜』（以下、『仏智年譜』と略す）、『勝定国師年譜』（以下、『勝定年譜』と略す）、『蕉堅藁』、『空華日用工夫略集』（以下、『日工集』と略す）である。

○誕生――建武三年（一三三六）十一月十三日　（一歳）
○京都修行期――貞和四年（一三四八）～貞治三年（一三六四）（十三歳～二十九歳）
○関東修行期――貞治三年（一三六四）～応安元年（一三六八）（二十九歳～三十三歳）
○中国留学期――応安元年（洪武元年、一三六八）～永和三年（洪武十年、一三七七）　（三十三歳～四十二歳）
○九州静養期――永和三年（一三七七）～永和四年（一三七八）（四十二歳～四十三歳）
○近江隠遁期――永和四年（一三七八）～康暦元年（一三七九）（四十三歳～四十四歳）
○甲斐恵林寺住持期――康暦二年（一三八〇）～永徳二年（一三八二）　（四十五歳～四十七歳）
○関東再遊期――永徳二年（一三八二）～永徳三年（一三八三）（四十七歳～四十八歳）
○摂津・讃岐・阿波隠棲期――至徳元年（一三八四）～至徳三年（一三八六）　（四十九歳～五十一歳）
○鞏寺（等持寺・等持院・相国寺）住持期――至徳三年（一三八六）～応永十二年（一四〇五）　（五十一歳～七十歳）

○死没――応永十二年（一四〇五）四月五日　（七十歳）

【注】絶海は近江、甲斐、摂津にそれぞれ赴く直前にも、短期間ながら京都に滞在していた。また、中国に渡る前も、一旦関東から帰洛していたと思われる。

一　八十番詩～八十五番詩

さて、八十番詩～九十四番詩を見ていくが、便宜的に全体を三区分し、考察を加えていく。八十番詩～八十五番詩の詩題を掲げる。

・［制に応じて三山を賦す］（八〇）
・［御製、和を賜ふ（大明太祖高皇帝）］（八〇A）
・［和す（道彝）］（八〇B）
・［和す（会稽の一如）］（八〇C）
・［趙文敏の画］（八一）
・［行人至る］（八二）
・［永青山の廃寺］（八三）
・［杜牧集を読む］（八四）
・［和靖の旧宅］（八五）

まず八十番詩と、それに和韻した明の太祖高皇帝（洪武帝・朱元璋。一三二八～九八）の詩（八十番詩A）とを挙げる。

八〇　応レ制賦二三山一　　絶海中津

熊野峰前徐福祠。満山薬草雨餘肥。只今海上波濤穏。万里好風須二早帰一。

八〇―A　御製賜レ和　　大明太祖高皇帝

熊野峯高血食祠。松根琥珀也応レ肥。当年徐福求二仙薬一。直到二如今一更不レ帰。

『仏智年譜』[2]永和二年条に、

永和二年丙辰。師四十一歳。大明洪武九年春正月。太祖高皇帝召二見英武楼一。問以二法要一。奏対称レ旨。又召至二板房一。指二日本図一。顧問二海邦遺跡熊野古祠一。勅賦レ詩。詩曰。熊野峯前云云。御製賜レ和曰。熊野―。又賜以二僧伽梨・鉢多羅・茶褐裰・楠栗杖・并宝鈔若干一。詔許レ還レ国云云。（下略）

という記事があることから、絶海が永和二年（洪武九年、一三七六）、金陵（南京）の英武楼において高皇帝に謁見し、徐福の熊野渡来に関する詩を唱和したことがわかる。絶海のこの出来事は広く流布していたらしく、彼が「蒲室疏法」を将来して、わが国の四六文の作法を定着させたことと並んで、度々他の禅僧の詩文集―例えば『補庵京華前集』（横川景三著）、『翰林葫蘆集』（景徐周麟著）等―に指摘されている。両詩は『中華若木詩抄』[3]にも採られており、絶海詩には、

此詩ハ、絶海和尚渡唐アリテ、大明太祖高皇帝ノ御前ニテノ詩也。此時ハ洪武九年ノ春也。高皇帝英武楼ヘ召レテ、日本国ノ使僧津絶海ニ御対面アリテ、日本ノ風土ヲ御尋アリ。其次デニ、「信ヤ、日本ニ三山アリ、ソコニ徐福ガ祠アリト云ハ。若実ナラバ、ソレニ就テ詩ヲ献ゼヨ」トアル処デ、賦二此詩一也。天子勅感アリテ御制、尊和ヲ下サル、也。名誉ノコト也。

総ジテ、日本ニ名僧ヲ御賞翫アルハ、コノ為也。(下略)

という抄文が付されている。絶海と高皇帝の詩の応酬は、絶海自身のみならず、本朝禅僧の名誉事として受け止められていたようである。なお絶海詩は、横川編『百人一首』の巻頭にも配されている。

中国僧の天倫道彝と一菴一如の和韻詩(八十番詩B・C)については、その序文につぎのように説明されている。

鹿苑絶海和尚曩遊二中華一。卓二錫于龍河一。時当二大明洪武九年之春一也。太祖高皇帝召見二英武楼一。顧問二海邦遺跡熊野古祠一。勅令レ賦レ詩。欣二蒙賜一レ和。未レ幾東還。宝蔵珍護積有レ年矣。□□壬午秋余使二日本国一一二見万年山中一沐以二旧遊一為レ懐数相詢慰。一日捧二示御製詩軸一幸獲二欽覧一。既而徴次二厳韻一執レ筆未レ敢。辞固弗レ容。謹拝頓首書二其末一云。

「壬午」は応永九年(一四〇二)。この年の秋、明使天倫は一菴と来日し、万年山相国寺で絶海と再会した。以来二人は、屡々旧交を温め合ったのだが、ある日、天倫は高皇帝自作の詩軸を拝見する機会を得、一菴とともに同詩に次韻したという。ちなみに天倫らが入洛したのは応永九年九月五日、明の建文帝の詔書(二月六日付、『善隣国宝記』巻中所収)を足利義満に届けるのが目的であった。翌十年二月十九日、天倫らは京都を出発して帰国の途についたのだが、その際、義満の命を受けて、天龍寺の堅中圭密(第三十六世)を使者とする遣明使一行が、絶海が作成した外交文書(『善隣国宝記』巻中所収)を携えて、彼らと同船で入明している(『吉田家日次記』『翰林葫蘆集』等)。前々稿でも触れたが、その一行のなかには、絶海の弟子である龍渓等聞も含まれており、彼は『蕉堅藁』と『絶海和尚語録』の序・跋を中国僧に請い受けに行くところであった。

つぎに八十三番詩と八十五番詩について。「永青山の廃寺」については、入矢氏や梶谷氏が、『西湖志』巻三に見られる永清塢の永清庵を参考に挙げられているが、『扶桑五山記』一・[大宋国諸寺位次]によると、絶海が季潭宗泐(全室和尚、一三一八～九一)について禅道修行に励んだ中天竺寺の名勝の一つに「永青山」とある。また、「和靖」とは、北宋の詩人である林和靖(林逋、九六七～一〇二八)のことである。銭唐(浙江省杭州市)の出身で、字は君復、諡は和靖、博学で詩や書にも秀でており、梅と鶴とを愛し、西湖(浙江省杭県)の孤山に隠れて、生涯、官職につかなかったという(『宋史』等)。わが国の五山文学僧が最も敬愛する詩人のうちの一人である。『勝定年譜』[4]には、

三十五歳。拝二永安塔一。訪二和靖旧姑蘇台一。

という記事があり、絶海が洪武三年(応安三年、一三七〇)に永安塔や姑蘇台、西湖の畔にある和靖の旧宅を訪れたことが知られる。

ところで、如心中恕の『碧雲稿』(『続群書類従』第十二輯上所収)には、[永青山廃寺](五言律詩)や[和靖旧宅](七言絶句)という詩が認められる。後者は絶海の八十五番詩と同一詩であるが、『翰林五鳳集』巻第六十一を見ると、この詩は絶海作とある。『碧雲稿』には約三百首収められているが、詩題の下に「在唐作」という注記が

ある場合があり、[永青山廃寺]や[和靖旧宅]は中国での作とされている。如心(夢窻疎石―古剣妙快―如心)は筑紫の出身で、応安元年(洪武元年、一三六八)に絶海や汝霖妙佐とともに入明(『延宝伝灯録』『本朝高僧伝』『日本名僧伝』)、『碧雲稿』に「足下政在妙年奮発之秋。又得津蔵主猷侍者諸勝友為侶。宜切磋琢磨。以成事業。(中略)癸丑九月八日　竹菴道書　中恕侍者収」とあるように、その後も絶海らと行動を共にしたと思われる。[6]そのことが、彼の詩文集に八十三番詩と同じ詩題の詩があったり、八十五番詩が混入した原因になったのではないだろうか。なお、『碧雲稿』の伝本は、内閣文庫に写本が二本―『碧雲藁』(和書番号一八三五〇、江戸初期書写)・『碧雲詩集』(和書番号一八三七八、書写年不明)―残っている。両書とも未だに詳細な調査は行なっていないが、前者は続群書類従本と同系統のように思われる。後者は明らかに系統が異なっており、「在唐作」という注記もほとんどない。七言絶句の部には、絶海作の[永青山廃寺]も見受けられる。

八十一番詩、八十二番詩、八十四番詩の詠作状況は、その詩題や詩句からでは判然としないが、前後の作品が中国で詠まれたものなので、中国での作と考えてよいだろう。「趙文敏」とは趙孟頫(一二五四～一三二二)のことである。

二　八十六番詩

・[観中を懐ふも至らず　時に臨川復位の訴えに因りて、宇治に客居す](八六)

この詩に関しては、前稿で少しく触れたので、ここでは詳述しない。夢窓派(春屋一派)が臨川寺の復位を幕府に提訴したのが永和四年(一三七八)五月十四日(『日工集』)、絶海が雲居庵(天龍寺の開山塔)に寄宿したのが翌康暦元年十月(『仏智年譜』)、そして詩中に「秋前の白雁」ということばが見られることから、絶海は永和四年の夏頃に宇治に客居し、この八十六番詩を詠んだのではないだろうか。ちなみに同年の冬頃、絶海は宇治から近江に行かんとして、その際に五十三番詩を詠んだと思われる。「観中」とは観中中諦、彼の『青嶂集』(上村観光氏蔵、史料編纂所謄写本)には[和絶海和尚韻]と題し、八十六番詩に和韻した詩が収録されている。

三　八十七番詩～九十四番詩

・[後醍醐廟にて梅を看る　廟は亀山の多宝院に在り](八七)
・[梅花の帳](八八)
・[蘭を移す](八九)
・[春夢](九〇)
・[花下に客を留む](九一)
・[折枝の芙蓉](九二)
・[画梅に題す　二首](九三)
・[寒江独釣の図](九四)

八十七番詩について。「亀山」とは霊亀山天龍寺、詩題の下の自注

にも記されているように、「多宝院」は後醍醐天皇（一二八八～一三三九）を祀った塔頭である。このことは、『扶桑五山記』三・［天龍寺　諸塔］においても確認できる。『仏智年譜』康暦元年条に、

康暦元年己未。冬十月法兄普明国師招レ師館二于亀山雲居庵一。性海見和尚主二天龍席一。十二月請レ師居二第一座一。至二明年春一美解。

とあるように、絶海は近江から帰京した後、康暦元年十月に春屋妙葩（普明国師、一三一一～八八）に招かれて天龍寺の雲居庵に住し、同年十二月、住持の性海霊見（第十七世）に請われて同寺の前堂首座（第一座）になった。その後、翌二年（一三八〇）の春頃に前堂首座を退き、同年十月八日には甲斐の恵林寺に入寺するのであるが、ここで先に結論から述べると、八十七番詩を含めて、ここに挙げた詩群は、絶海が天龍寺に滞在している頃、あえて言えば、康暦元年の冬頃から翌二年の春頃にかけて詠まれたと見て差し支えないのではないか、とわたくしは考えている。と、いうのも、次稿で改めて検討するが、続く九十五番詩、九十六番詩は甲斐での作である。また、八十七番詩、九十番詩、九十一番詩の季節は明らかに春であるし、八十八番詩や九十三番詩も、季節が春であるが故に詠じられたのではないだろうか。八十九番詩に関しては、春蘭と秋蘭とが考えられる。九十二番詩は詩中に「残粧の影落つ、玉屏の中」という句があり、屏風に描かれた芙蓉を詠じたと思われるが、「佩を鳴び帰り来たれば、秋淡涼」という句も見受けられる。九十四番詩の詠詩の季節は断定できない。

島田修二郎、入矢義高氏監修『禅林画賛　中世水墨画を読む』（毎日新聞社、昭六二）には、九十三番詩の第一首目が記された梅花図（作品番号133、筆者不詳、題詩・絶海中津、一三八〇年代、紙本墨画、一二九・〇×三五・四㎝、正木美術館）が収録されている。

九三　題画梅　二首　（第一首目）

孤山曽訪中庸子。照レ水梅花処士家。駅使不レ伝南国信。黄昏和レ月看二横斜一。黄昏一作二夢魂一

星山晋也氏は解説のなかで、

○この題詩は、絶海の詩文集『蕉堅稿』に他の墨梅詩一首とともに載せられている。（中略）その記載内容からみても本図は本来は双幅であったものの一幅（他は現存しないが雪中の上り梅であった可能性がある）であったと考えることができる。

○いずれにせよ、晩年の筆跡ではない。相国寺蔵の絶海筆「十牛頌」と比べても、それよりやや早い頃のものに思われる。

と興味深い指摘をされている。なお、梅花図の筆者に関しては、詩後の自注に、

作二右画一者不レ顕二姓名一。只号二九州狂客一。余嘗見二之塗中一。躬レ荷友レ牀而行。遇二勝景一。則輒靠レ此以嘯吟出レ語頗異。蓋善レ画而隠二于狂一者也。然其用レ筆失二於瘦硬一不レ満二人意一。故後詩以解レ嘲云。

とあり、ただ「九州の狂客」と号したことしか明らかになっていない

が、星山氏は如拙の可能性を示唆されている。絶海は中国から帰国した後、しばらく九州で静養していたので、その時に筆者と邂逅したのかも知れない。

おわりに

以上のように、今回は七言絶句の一部（八〇～九四）を見てきた。そして、少し曖昧な箇所を残してはいるものの、八十番詩、八十番詩A、八十一番詩～八十五番詩は中国での作、八十番詩B、Cは京都（相国寺）での作、八十六番詩は宇治での作、八十七番詩～九十四番詩は京都（天龍寺）での作と結論付けるに至った。七言絶句の部の巻頭に八十番詩が配されているのは、同詩が有名であったことが多分に影響しているだろう。本稿は紙幅の都合で、中途半端な感を否めないが、次稿では、残りの七言絶句と五言絶句とを見ていきたいと考えている。

〔注〕

（1）拙稿「絶海中津『蕉堅藁』の作品配列について（一）―五言律詩の場合―」（『古代中世国文学』第十五号所収）、「同（二）―七言律詩の場合―」（同第十六号所収）。

（2）引用は『大正新修大蔵経』第八十巻「続諸宗部」による。

（3）引用は大塚光信氏・朝倉尚氏他校注『中華若木詩抄　湯山聯句鈔』（新日本古典文学大系53、岩波書店、平七）による。

（4）引用は『大日本仏教全書』第六十九巻「史伝部八」による。

（5）『碧雲稿』には［奉寄絶海和尚］や［春夜看月寄蕉堅老人］のほかに、［送絶海津蔵主帰日本 在唐作］という詩もあり、如心が絶海の帰国後も、中国に滞在したことがわかる。なお汝霖に関しては、『日本名僧伝』につぎのような逸話が伝わっている。彼も高皇帝に謁見したのだが、絶海が即座に絶句を作り、御製の和を賜ったのに対し、汝霖は律詩を作ることができず、絶海の光栄を羨んでいたらしい。このため、絶海と同船で帰国する途中、太祖が次韻した宸筆を、絶海から奪い取って海中に棄ててしまったという。ただし、『蕉堅藁』所収の［佐汝霖の宝幢に住する諸山疏 序有り］（一三三）の記述は好意的であるし、康暦二年（一三八〇）に絶海は播磨の法雲寺（兵庫県赤穂郡）の住持を汝霖に譲っている（『仏智年譜』）。

〔付記〕前稿で元章周郁の在明期間に関して触れたが、応安四年五月一日以前に入明し、帰国した可能性も付け加えておきたい。玉村竹二氏は「入元の後は、主として絶海中津と行動を共にし（或は入元も同時であったかとも想像する）、云々」（『五山禅林伝記集成』、講談社、昭五八）と記しておられる。

資料閲覧に際して、国立公文書館内閣文庫当局のご厚情を賜った。ここに記してお礼申し上げる。

――あさくら・ひとし、広島大学大学院博士課程後期在学――